

長期不登校経験のある高校生の自己イメージに関する研究

—人物画を中心とした高校三年間の経年変化に着目して—

20003FRM 澤田 萌乃

キーワード：長期不登校，自己イメージ，経年変化

I. 問題

1. 不登校の現状

1941年、米国シカゴ大学の Johnson, Falstein, Szurek, & Svendsen (1941) を起源とする不登校の研究は、不登校児童生徒の増加や、不登校のタイプの変容に伴い、これまで多くなされた。文部科学省 (2021) によると、令和2年度の不登校児童生徒の数は過去最多を更新した。また、重要なことに不登校児童生徒のうち、90日以上欠席者は54.9%であり、長期に及ぶ不登校児童生徒が半数を占めているのが現状である。不登校が長期に渡るとそれだけ将来的な生活や対人関係に不安が生じることが明らかとなっており、内閣府 (2010) の調査では引きこもりに該当する子ども・若者の多くが小中学校時代に不登校を経験していることが明らかとなっている。引きこもりになる人々のある一定の割合で思春期に不登校であった人がいる現状を考えると、引きこもり予防の一つの方法として不登校への対応は有効であると思われる。

2. 不登校の長期化と自己イメージ

早川・大久保・花田・後藤 (2015) をはじめとしたこれまでの研究では、長期化した不登校の背景には三つの基本病理が存在することが明らかとなっている。症状レベルで似ているこれらの背景病理を自己イメージを主とする内的体験内容を明らかにすることで鑑別が可能となることを示している。鑑別の観点以外での不登校と自己イメージについて、松井・笠井 (2012) は不登校の経験は自信のなさというかたちで彼らの生活に影響し、自分の在り方が見えず不安を抱え続けていると述べている。また、小林・霜村 (2001) は現在学校復帰している不登校経験のある生徒を対象とした調査を実施し、不登

校経験者の現時点での客観的な状態像と自己イメージの変動が密接に関連していることが明らかとなった。以上の結果から、不登校の経験は彼らの自己イメージに影響を与え、そして学校復帰の過程で変容していくと予測される。しかし、これまでの研究では不登校生徒の自己イメージに関する横断研究はなされているものの、変容を扱った縦断研究は数少ない。

II. 本研究の目的と仮説

本研究では石本 (2020)、和田 (2021) の結果を比較材料とし、思春期から青年期に至る高校三年間の中でどのような自己イメージの変化がみられるかについて、長期不登校経験のある2事例の人物画を中心とした経年変化の検討を行うことを第一の目的とする。Erikson (1959) は思春期から青年期にかけては自己の在り方を思索・検討して自己イメージの転換・再構造化を進める時期であると提言しており、自己イメージの変容に対して不登校経験者を対象にその要因を検討することで、社会への参加に向けた彼らへの支援を考えるうえでの一つの視点になるのではないかと考える。

また、青年期は学業面での評価を受ける機会が増えるため、学習能力とその基盤となる認知機能が自己イメージの変容に関連していると推測し、学習能力、認知機能の二つの側面から自己イメージの変容の検討を行うことを第二の目的とする。

III. 方法

1. 調査協力と検査時の状況

不登校特例校であるS学園に通う高校生2名(以下、事例A,B)であった。検査時、Aは進学先が決まっており、Bは未定の状態であった。

2. 調査内容

心理検査として、人物画テストとロールシャッハテストを実施し、自己イメージの把握を行った。認知学習機能の測定には ASSQ、ウェクスラー式知能検査、改訂版読み書きスクリーニング検査を実施した。

IV.事例

1.事例 A (18 歳, 高校三年生男子)

三年間の人物画を比較すると、目に色がつき、地面と離れた位置に描かれていた人物から地に足ついた人物への変化が見られた。これらの結果は、一応の自己イメージはあるものの距離の通り、存在感が希薄な自己イメージから自分が自分として生きているような実感をもった自己イメージへの変容がみられたことを示唆していると考えられた。無力感を覚える手から、握りしめた力強い手への変化は、外界への意識と社会への適応力を象徴していると思われた。学習能力に関しては部分的な変動が見られ、認知機能に関しては、「知覚推理」が三年間で向上した。

2.事例 B (17 歳, 高校三年生男子)

2019 年度は人物画の実施を拒否した B であるが、三年間を通して人物画が描けるようになったことが大きな変化である。加えて、B の趣味に関連した複数の付加物が人物と離れたところに描かれた昨年度と比較し、今年度は人と関連させるように一つの付加物が描かれた。これらの変化は、好きなことをしている自分から人間像が出来始めたものの複数化した自己イメージが今年度はまとまったことが窺える。身体の割に大きい頭と小さい手からは外界に意識は向いているが、自信のなさを抱えていると思われた。学習能力に関しては部分的な変動が見られ、認知機能に関しては、「言語理解」が三年間で向上した。

V.考察

本研究では 2 事例を対象に三年間の経験変化を追ったところ、両者の人物画で大きな変化が見られた。自己イメージの変化の程度と比較すると自己イメージの変容に学習能力が影響している可能性は低いと思われたが、認知機能に関しては、事例ごとで自己イメージの変容を支え

ている認知機能が異なることが示された。具体的には、A は周囲の状況を理解する能力の変化が、B においては論理的思考や抽象的思考の変化が自己イメージの変容を支えていると思われた。他の要因に関して、今回調査を行った S 学園は生徒一人一人に対して個別のカウンセリングを行う等心理面へのケアが手厚い点が特徴の学校である。青戸・田上 (2005) は不登校生徒に対して心理支援を行うことによって自己イメージがポジティブなものに変容し学校復帰を遂げた事例を挙げている。また佐々木 (1984) は、不登校児童生徒は共通して否定的な自己イメージを持っており、支援については彼らの内面、とりわけ自己イメージにアプローチする必要性があると述べている。これらの研究結果から、S 学園での彼らへの心理的支援が自己イメージの変容の一要因であると考えられた。

2 事例に共通してみられた変化としては外界に対する意識の変化であった。高校卒業を目前に自身の進路を検討する時期に差し掛かり、客観的に自己を評価していく体験が、自己イメージの変容に影響していると考えられた。また、2 事例の差に関して、進学先が決まっている A はこれから社会に参加していくことへの自信が現れていた一方で、B のその人物画からは A とは逆の自己イメージを持っていることが示唆された。都筑 (2009) は卒業後の進路希望先の違いによる時間的展望について検討したところ、進路希望先が未定な生徒においては、空虚感が強く将来への希望や志向性が弱いことが示唆された。ネガティブな自己イメージと未来の時間的展望の乏しさに関連があることは明らかとなっており (Tohyama & Nakajima, 1989)、A と B の自己イメージの差異は、未来に対する時間的展望の違いによるものではあることが推察された。

VI. 今後の課題

今後も自己イメージに関する多くの事例を重ねることで不登校生徒の背景理解につながることを期待される。